

# mundi



The Magazine of the Japan International Cooperation Agency

# 4

特集

## スポーツと開発

[ムンディ] No. 79  
April 2020

# 人々の 可能性をひらく



## Contents

- 02 目次  
プロローグ Vol. 18
- 04 **特集 スポーツと開発  
人々の可能性をひらく**  
自国に誇りと喜びを  
06 オリンピック、パラリンピックへの出場を目指して  
ミクロネシア／ケニア／ボツワナ  
人間力の向上を  
08 自分を信じ、友を信じる 心を育む体育 ミャンマー  
12 質の高い授業で「知識・技能・態度」を身につける カンボジア  
社会参加の促進を  
14 どんな障害者も暮らしやすい社会へ タイ  
16 仕事とスポーツで自信をつける ラオス  
人や地域と交流を  
18 心に火をつけたい。車いすで支える自立  
20 世界とつながるニッポン パラオ／南スーダン  
22 特別授業 世界の課題解決に貢献するスポーツ
- 24 **JICA海外協力隊がゆく Vol. 17**  
メキシコ
- 26 **世界につながる教室⑨**  
研修の成果をみんなでシェア
- 28 **地球ギャラリー Vol. 139** フィジー共和国  
写真・文●村上志緒 植物療法研究家  
未来へ託す薬箱
- 34 **教えて！ 外務省**  
知っておきたい国際協力⑨
- 36 JICAカレンダー
- 38 読者の声、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 **わたしが見つけたSDGs Vol.19**

\*掲載されている情報等は取材当時のものです。



信頼で世界をつなぐ  
Leading the world with trust



ミャンマーの小学校で導入が進む日本の体育。\*全員参加・協力・チームワークを重視する(写真：吉田亮人)。

# プロローグ Vol. 18

## とともに汗をかき、 心がつながる

文・高橋慎一

ランニングが趣味の私にとって、世界各国で開催される大会に参加することは人生最大の楽しみです。「世界中のランナーとともに走りたい」と好きが高じて立ち上げた「地球の奥地を走る」マラソンツアーでは、70か国以上を訪れました。

私が好きな大会に、南アフリカで開催されるコムラツズマラソンがあります。コムラツズとは戦友や同志という意味で、第1次世界大戦で戦友をなくした退役軍人が、みんなで平和を祈るために始めた大会だといわれています。今年で95回目を迎える歴史があり、最初の参加者は34名の若者でしたが、いまや世界のすべての大陸から、その趣旨に魅了された老若男女2万7000人のランナーが集まり、途切れることのない応援に背中を押されて90キロメートルを走ります。毎年、スタート地点とゴール地点が入れ替わります。スタート地の一つであるピーターマリッツブルグは、のちにインド独立の父と呼ばれたマハトマ・ガンディーが人種差別に遭い、人生を自由と平等のためにささげる決心をした街です。このコムラツズマラソンに限らず世界には強烈な魅力がある国際色豊かな大会がたくさんあります。

マラソン大会の醍醐味は、脚力を問わずみんなが同じ時に、同じ場所を走り、無言の意思疎通があることです。美しい緑が広がる大地や、荒涼とした風景が続く大地を、ともに駆けていくことができます。沿道の人たちは、世界の超一流ランナーだけでなく私のような市民ランナーにも同じように温かい声援を送ってくれます。給水ポイントも国籍、肌の色を問わず平等です。誰もが一つの目標の中でつながっていることに大きな一体感を感じます。そしてゴール後の会場は、ランナー同士ががんばりを称え合う分け隔てない喜びに包まれます。マラソンとともに汗をかき——このおかげで世界各地



イラスト●中村知史

に多くの友人もできました。私の娘と息子が海外をバックパックで旅したときに、大きな助けをくれたのも彼らでした。日本のマラソン大会に招いたボルネオ人のランナー仲間、交流の楽しさを広めたいと、地元のマラソン大会の前日に「練習会」と称して諸外国のランナーと国際交流ランを実施するようになりました。時には見ず知らずのインド人のランナーから次のような連絡が届いたことも——「私の友人がドイツのベルリンであなたと会ったと聞きました。今度の東京マラソンに出場するので家に泊めてくれないか。食べものは宗教上の理由から限られているので○○○にしてくれ」。遠慮や謙虚、美德というのは国によるなあと、笑ってしまいました。

日本人は、「外国は危ない。怪しい人が多い」と警戒することが多い気がしますが、もしかすると相手も「日本人は怪しい」と考えているかもしれません。ただ、少し勇気をもって話しかけ、少し肩の力を抜いて相手の環境・歴史・文化・生活を理解しようと心がけて接すれば、人と人の心はつながるように思います。

私は、世界のマラソン大会を走りながら各地の人々と交流できることに大きな幸せを感じています。その幸せが人生で前に進む力にもなっています。日本人も外国人も、地球人という同じ生物です。走っているときや走った後には、おたがいに豊かで澄んだ気持ちとなり、目の前には世界共通の青空が広がります。

高橋慎一(たかはし・しんいち)

1971年から3年間、世界一周放浪旅に出て、見ず知らずの東洋の若者に注いでくれた人々のやさしさに感動する。帰国後、国際関係の仕事で国際感覚や諸外国とのビジネスマナーを学び、2011年より旅行会社TABIZ(タビーズ)で、「慎ちゃん」と「地球の奥地を走る」マラソンツアーを企画。日本ではあまり知られていなかったイランやイラク、イスラエル、北朝鮮、ハイチ、フォークランド諸島などの大会に参加して、その様子をランニング専門誌にも提供。世界各国のマラソン文化を日本に広めている。

「三つの方針」をもとに  
スポーツで国際協力を

2006年の夏、私は障害者に対する水泳指導の短期青年海外協力隊員となり、マレーシアでも視覚に障害のある子どもたちに水泳を教えました。パラリンピアンとして、中学校の教員として、そして視覚障害者水泳教室の講師として得た経験を伝えたいという思いで挑戦しました。ペナン島では20名近くの盲学校の子どもたちを指導しました。視覚障害者は見て学ぶことができませんから、手取り足取り教えました。心がけたのは、泳ぎ方よりも「潜り方」を教えること。プールの底に基石のようなものを沈めて拾ってきたり、潜っている私の手に触って何本か当てっこしたり。遊び感覚で楽しく潜ることを覚えた子どもたちは水への恐怖心がなくなり、短期間である程度泳げるようになりました。

そんな一人ひとりに届く協力隊事業をはじめ、JICAは多岐にわたってスポーツを通じた国際協力を展開している。その方針は、①人間力の向上を、②社会参加の促進を、③自国に誇りと喜びを、というものだ。スポーツを通じて達成感や自己肯定感が高められ、競技によってはチームワークやコミュニケーション

力も養われますが、そのためには指導方法も重要になります。人間力の向上のためには、人間として成長し、仲間と喜び、励まし合えることの幸福を感じられるような指導が必要だと思います。

また、スポーツのよさは多様なケースに適用できることですが、その利点が生かされていない現状も見受けられます。たとえば一般的な競泳では、バタフライや平泳ぎでゴールのときに片手タッチだと失格になります。それでは片腕がない選手は参加できない。社会的弱者が参加しやすい受容力のある社会をつくるには、こうしたルールを変更したり現状に適応させたりする柔軟な発想を持つことが必要ではないでしょうか。1992年、私は17歳でバルセロナ・パラリンピックに参加しましたが、障害者スポーツがこれほど注目され、応援されるものとは思っていませんでした。あの日々の感動と驚きは一生忘れません。

東京パラリンピックでも多くの人が夢や誇りを感じられるよう、競技会場を満員にすることや選手村の環境整備に取り組み、ホスピタリティを提供したいと思います。

壁を壊す意識改革を

さらにJICAは、スポーツを通じた国際協力で市民の参加を促している。

東京2020に出場する各国の



特集 スポーツと開発

# 人々の可能性をひらく

## スポーツの力で豊かな社会を!

### ① 人間力の向上を

学校での体育の授業や運動会の実施、課外活動の支援を通じて、健康で活力ある生活を送るための基礎を培いながら、目標達成への忍耐力や、他者との協調性といった数値では測定しにくい能力の向上を目指す。

### ② 社会参加の促進を

障害者や女性、子どもなど社会的弱者の積極的な社会参加を促す。さまざまな出身地の人々が集まり、同じ目標に向かって協力し合うことは、民族間の融和を図り、平和促進にもつながる。

### ③ 自国に誇りと喜びを

スポーツ競技力を向上させ、国際大会に出場するようなトップアスリートの育成を目指す。アスリートたちの活躍が、国民に誇りと喜び、夢や感動を与え、国民どうしの一体感や国際社会との連帯も生まれる。

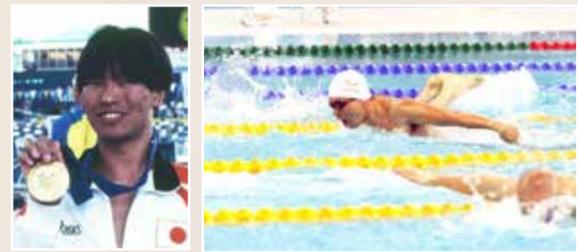
### さらに! 人や地域と交流を

JICAはスポーツによる国際協力を海外協力隊事業をはじめ1965年から草の根レベルで展開し、2019年3月末までに88か国にのべ4,679名の隊員を派遣している。国内の自治体に向けて、スポーツを通じた国際理解の促進も図っている。

選手を、日本の自治体が事前合宿として受け入れるホストタウンの取り組みへの協力もその一つでしょう。地域に滞在する選手の練習や生活を市民がサポートすることで交流が生まれ、相互理解を深めることにつながるよう期待しています。受容力のある社会をつくるヒントも得られるはず。東京パラリンピックの开幕式が催される日を「ジャパンパラリンピックデー」と定め、それを軸に今後パラリンピックムーブメントを展開していきたいと考えています。よく、「障害の壁を乗り越えて」といわれますが、私はその表現は間違っていると思います。「障害の壁をつくっているのはほとんどの場合、多数の発信者の側ですから、壁を壊す努力が必要なのは、障害者ではなく壁をつくっている側です。東京2020を機にそんな意識の改革が起きればうれしいです。パラリンピックは「人間の可能性の祭典」です。選手を応援すること、「すごい!」と価値観を揺さぶられる瞬間がきっとあるはず。自分たちがつくっている、かもしれない「壁」を壊していきましょう。

また、勝ち負け以上に健康と、よりよく生きることも大切です。スポーツを通じて、心も体も健やかで豊かな人生を送ることは世界共通の人々の願いであると信じ、今後もスポーツのよさを広めていきたいと考えています。

「スポーツと開発」というテーマは、スポーツをすること自体が権利であり、その実践を通じて個人や集団の能力を高めたり、可能性を広げることで、人々の生活をより健康で豊かなものとする考え方に基づいている。その意義について、日本パラリンピック委員会委員長の河合純一さんが語った。



左：1996年のアトランタにて。パラリンピック2度目の出場で二つの金メダルを獲得した。右：2008年の北京にて。得意の自由形のほか、バタフライや背泳でも活躍した(写真提供：エクスワン)。

**河合純一**(かわいじゅんいち)さん  
1975年静岡県生まれ。早稲田大学大学院教育学研究科修了。92年バルセロナ・パラリンピックに全盲の水泳選手として出場して以来、パラリンピックに6大会連続で出場し、金・銀・銅21個のメダルを獲得。現在、日本パラリンピック委員会委員長、東京パラリンピック日本代表選手団団長、日本パラリンピアンズ協会理事(前会長)などを務める。著書に『夢追いかけて』(ひくまの出版)。



自国に誇りと喜びを

# オリンピック、パラリン

# ピックへの出場を目指して



左：片桐さんはナショナルチームにスタッフとして同行。準備運動、筋力トレーニング、体の調整を担当する。右：20年1月に行われた東京オリンピック・アフリカ大陸予選で優勝して出場が決まった瞬間、チーム全員で喜び合った。左手前が片桐さん。



**player's DATA**  
**ケニア共和国**  
**女子バレーボールチーム**

- ① 2019年アフリカ選手権準優勝、アフリカ競技大会優勝、ワールドカップ12か国中11位、20年東京オリンピック・アフリカ大陸予選優勝。
- ② ケニア人ならではの身体能力。これまでの日本人指導者から受け継いでいる守備的バレーが得意。
- ③ ケニアの世界ランキングは低い、他の出場国から1試合1セットでも多く勝ち取り、世界を驚かせたい。



トレーニングの  
成果を試合で証明!



青年海外協力隊 片桐翔太さん



派遣期間

2019年4月～2021年3月

赴任してすぐに感じたのは、ケニアの選手たちは身体能力が高いものの、バレーボールをするうえでの基礎的な筋力が不足しているということでした。選手だけでなくコーチにもトレーニングの大切さがなかなか伝わらず、トレーニングが試合のどこに生きてくるかを具体的に説明して理解してもらいました。さらには、実践して成果が上がった選手を例に挙げて地道な説明をくり返し、他の選手にも理解を広げ

てきました。

また、ケニアでは選手とコーチの上下関係が強いので、私はその間に立ち、選手が言いづらいことをコーチに伝えるなどして、選手の体の調子にも気を配りました。多民族で構成されるこのチームの活躍が、ケニア人の気持ちをひとつにすることを願っています。

ボツワナの代表チームコーチとして柔道を教えたり、筋力トレーニング指導を行ったりしています。日々稽古が行われる井坪先生記念道場は、私の前任者で任期中に不慮の事故で亡くなった井坪圭佑さんの遺志を継いで2017年に設立されました。大学の柔道部出身だった井坪さんのおかげでボツワナでも細かな指導を受けられるようになり、その教え子たちが今オリンピックを目指しています。

19年には東京で開かれた世界選手権にガビン・モゴバ選手が出場するために日本に遠征し、私の出身地



である青森県で強化合宿に参加しました。柔道に対するモチベーションが上がりましたが、予算の都合上、国外試合にはなかなか出場できません。意識が高まるように選手に声をかけながら稽古に取り組んでいます。

オリンピック  
出場を機に  
柔道をボツワナに  
広めたい



青年海外協力隊 村上瑠希也さん



派遣期間

2018年7月～2020年7月

「笑顔を送った日、笑った日」



**player's DATA**  
**ティヤーナ・アダムス選手**

- ① 2018年オセアニア選手権大会出場、2018年第14回FINA短水路世界選手権大会出場、2019年第18回FINA世界選手権大会出場。
- ② 家族や友人からのサポートを力に練習に励んでいる。
- ③ 曾祖父は日本人で、昨年は愛知県江南市を親善訪問。また日本に行くのが楽しみ。



プールでの練習以外に陸上トレーニングも取り入れ、朝夕2回、1週間あたり10回前後の練習を行っている。



派遣期間

2017年3月～2019年8月  
2019年12月～2020年8月

シニア海外ボランティア 高橋昭文さん



各国で出場選手が決まる。実はその選手たちを支えているのが青年海外協力隊員やシニア海外ボランティアという国もある。日々の練習や試合での喜びと苦勞とは?

文●久保田 真理

**player's DATA**

- ① おもな成績
- ② 自身の強み
- ③ 出場にかける意気込みなど

記録更新も  
日本文化の理解も!

ミクロネシア水泳連盟の競泳ヘッドコーチをしています。オリンピックには、水泳発展途上国に対する特別枠でミクロネシア連邦から男女一人ずつが出場します。国内唯一のプールは浄化装置の故障、停電、豪雨などの影響を受け、十分とは言えない環境で選手たちは練習に励んでいます。

体力だけでは記録を伸ばせず、技術の向上が必要です。そのために必要な

基本動作を身につける練習に力を入れています。また、プールになかったペースクロック\*も購入し、定期的に泳ぎを測定することで選手の意識向上につなげています。60歳を過ぎた私自身も、水泳を通じて選手たちの成長を感じることができて幸せです。オリンピックでは記録更新はもちろん、各国の選手との相互理解や友好親善を深めてほしいです。

\*タイムを測るための分針と秒針のみの時計



水泳の練習風景。水温が32℃以上になり、練習を行うには危険な状態になることも。選手の安全と事故防止に細心の注意を払う。

**player's DATA**  
**ガビン・モゴバ選手**

- ① 2018年アフリカンオープン66kg級優勝。
- ② 長い手足を生かした攻撃柔道。アフリカ選手の中でずば抜けているスタミナに自信あり。
- ③ 19年に日本へ柔道留学し、厳しい環境に身を置いて努力してきた。今年5月の選考でオリンピック出場権を獲得したい。



井坪先生記念道場で稽古をする村上さんと井坪さんの教え子たち。オリンピックにボツワナの選手が出場することが井坪さんの夢だったという。





試行授業後、プロジェクトメンバーは動画を見ながら授業をふり返る。



日本体育大学 スポーツ文化学部  
岡出美則(おかで・よしのり)さん

ボスニア・ヘルツェゴビナやカンボジアで体育教育の導入を指導した経験を生かして、CREATEに専門家として参加。「ミャンマーをはじめ、これらの国々は民族紛争で大変な思いをしてきました。彼らが体育に求めるのは、子どもの体力向上やスポーツ選手の育成よりも、国中のみんながルールを守って仲良く暮らせるようにすることです」。



チームワークを  
磨いてがんばろう!



ミニバレーボールのルールは初心者でも楽しめるものになっている。サーブやスパイクはボールをつかんで投げる、レシーブはボールがワンバウンドしてから行う。



CREATEプロジェクトコーディネーター(パデコ)  
宮原 光(みやはら・ひかり)さん

JICAからCREATE実施の委託を受けた開発コンサルタント・パデコに所属。「ミャンマーでは先生が板書を読み上げて、子どもたちが復唱するという暗記中心の教育が50年以上続いていた。しかし新しいカリキュラムでは、ミャンマーで伝統的に大切にされてきた『五つの力\*3』に、これからの時代を生き抜くために

必要な『思考力』『創造力』『コミュニケーション能力』などの21世紀型スキルを組み合わせ、“表現する力”や“自ら課題を発見し、協働して解決していく力”が身につくように工夫しています。「どう思いますか?」「どういうやり方がありますか?」と子どもたちが意見を聞かれることで活気が増えています」。

運動が苦手な子でも  
自信を持つって

小学校の全学年および全教科の教科書を刷新・作成している。新しい教科書を作る過程では、こうして実際に授業を行って改善点を洗い出す。

授業の様子は、教科書の作成を行うカリキュラム開発チーム(CDT\*)が撮影し、日本体育大学の岡出美則さんら他のプロジェクトメンバーとともに視聴する。「ルール自体が難しいので、子どもたちがゲームを楽しめていない」「準備運動からレシーブの練習を入れた方がいいのでは」などと意見を出し合い、どのような形で教科書に掲載するべきか、活発な議論が交わされた。CREATEでは、カリキュラムの完成度を高めるために、こうしたふり返りを重要視している。

ミャンマーでは長く続いた軍事政権のもとで国民全体への教育がないがしろにされ、1980年代には体育が教科から外された時期があった。復活後もすべての小学校で体育の授業が行われていたわけではなかった。

ヤンキン教員養成校校長のアウン・ミヤット・ソーさんは、「旧カリキュラムでも体育の授業はありましたが、サッカーやバスケットボールのようなスポーツばかり

体育カリキュラム開発チーム(CDT)  
タン・ミン・ソーさん

「プロジェクトが始まったとき私には経験がなく、その重要性を理解しきれずにカリキュラム作りを諦めそうになりました。しかし、何年か続けてきたことで意義がわかってきました。継続していくことでミャンマーの体育はもっと発展し、子どもたちも授業を楽しんでくれるでしょう」

CDTのタン・ミン・ソーさん(後列)は元小学校教員という経歴を生かし、ミニバレーボールの試行授業で先生役を務めた。



人間力の向上を case1

# 自分を信じ、友を信じる 心を育む体育

これまで小学校での体育の授業に重きがおかれてこなかったミャンマーだが、JICAのプロジェクトにより、新しい世代が新たな体育を学び始めている。

文●光石達哉 写真●吉田亮人

案件名 初等教育カリキュラム改訂プロジェクト  
2014年5月～2021年3月

これはJICAが取り組む「初等教育カリキュラム改訂プロジェクト」(通称CREATE\*)の試行授業の様子だ。2014年から始まったCREATEでは、

「パスをつなげて、  
チームワークをよくしたい」

ミャンマー最大の都市ヤンゴンにあるヤンキン教員養成校附属校では、小学校4年生の児童たちが授業でミニバレーボールを行っていた(初心者でも簡単にプレーできるようにバレーボールのルールを簡略化したもの)。初めての体験で児童たちの動きはぎこちないが、いいプレーが出ると自然と歓声や拍手が起こった。児童たちは、「タイミングよくレシーブするのが難しいけど、得点が入ったときはうれしかった」「いいボールを上げて、チームワークをよくすればもっと上手にできると思う」と楽しそうに話っていた。



国名: ミャンマー連邦共和国  
通貨: チャット  
人口: 5,141万人(2014年9月、ミャンマー入国管理・人口省発表)  
公用語: ミャンマー語

1960年代から2011年まで軍事政権が続いていたミャンマー。諸外国からの協力を得られにくい状況のなか、JICAは1997年から児童中心型教育の導入など教育分野で支援を続けている。



特集 **スポーツと開発**  
人々の可能性をひらく

かつてのミャンマーは教師中心の教育でしたが、JICAの協力を通じて今は子ども中心の教育に変わってきています。教師は子どもたちの学びの環境を整える役割を担います。



ヤンキン教員養成校 校長  
アウン・ミャット・ソーさん

教員養成校は、教員を目指す若者が学ぶ学校。CREATEの拠点も同校の敷地内に置かれ、教員向けの新カリキュラム研修なども実施している。「今までミャンマーの子どもたちが将来の進路を決めるときは、自分の意志ではなく、親など周りの影響が大きかった。これからは自分が興味を抱いた得意な分野で力を発揮できる子どもになってほしい。それが国の発展につながることを期待しています」。

教員養成校で体育講師を務めるソー・タンさん。「新カリキュラムでは、以前はなかったグループ活動を重視するようになりました。歌いながら体を動かすなど、子どもたちが楽しめるものになっています」。



体育の授業で使うボールやフラフープなどの用具類は、ミャンマー教育省がほぼ全国の小学校に配っている。



オペレーターが編集ソフトを使って教科書を作成の様子。イラストがわかりやすいのも特徴。



教える側も  
わかりやすい!



ここなら  
歩きやすい?

小学2年生

輪っかジャンプ

2人1組で3本の輪っかを使い、相手の子が前に進めるように交代で輪っかを置いていく。ペアの子がうまく前に進めるように輪っかを置けるかな?



ちゃんと  
つなぐぞ!

小学1年生 ボール拾い&運びゲーム

ライン上に置かれたボールを拾い、後ろのバスケットに入れる。1人がゴールしたら、次の子どもがスタート。リレーでつないで全員がゴールすることを目指す。



小学3年生  
脚飛び越えレース

仲間が脚を伸ばして作った障害物を2人1組のペアで飛び越えていく。ゴールしたペアは新たな障害物を作り、障害物だったペアが新たな走者となり、全員が一巡するまでのスピードを競う。どちらのチームが速いかな?

脚を伸ばして  
飛びやすく



ヤンキン教員養成校附属校の児童たち。授業では児童たちが先生に質問したり自分の意見を言ったりと、積極的な姿勢が見られるようになった。

ルールを理解して  
仲間と力を合わせよう!

ヤンキン教員養成校附属校 校長  
キン・チーさん

ヤンキン教員養成校には附属校があり、幼稚園 (KGの1年制)、小学校 (G1~5の5年制)、中学校 (G6~9の4年制) で構成される。「新しい体育の授業で体が元気になるだけでなく、勉強が苦手な子どもでも、将来自分が好きな仕事を選んで生きていくという自信が育まれると思います」。



「減っているんじゃないか、体育や音楽ではゲームをしたり歌ったりして遊んでいるだけじゃないかと。しかし、実際に子どもたちの変化を見て、遊んでいるように見えて実は学習できていると感じ始めているようです」

タン・ミン・ソーさんは、近くの小学校でのエピソードを教えてください。

「病弱な子がいたので体育を休ませようとしたら、その子の親が『うちの子はもともと体が弱かったけど、体育の授業を通じて丈夫にな

って自信もつてきました。これからは体育を受けさせてください」と訴えてきたんです。子どもも体育を続けたいと言っていました」

自信を持ち、仲間と協力することは、平和な社会づくりにもつながっていく——岡出さんは最後に次のように語った。

「この国は多民族で複雑な問題を抱えています。みんなが仲良く暮らして生活していける国になってほしいと私は願っています。そういうところに体育や教育が貢献できると思います」

で、相手と競争することが中心でした。しかし、新カリキュラムは全員参加・協力・チームワークを重視したものに変わってきています」と話す。

体育のCDTメンバーであるタン・ミン・ソーさんは自らの幼少時代をふり返り「私は幼いころ体が小さくて運動や体育は苦手でしたが、仲間に入れてもらえませんでした。ですが新カリキュラムでは誰も差別せず、できる子どもも苦手な子どもも自信を持って取り組めるような内容を考えています。今の子どもたちは全員が、一生懸命やるうとする気持ちで後押ししてもらえます。いいプログラムと出合ったことに感謝しています」と目を輝かせる。

岡出さんは、四つのことをバランスよく学べる体育であると強調する。

「私たちの体育は、技能・体力の向上」を目指しつつも、かつしてそれを第一にするわけではありません。「私はこれができる。自分分はすごいんだ」という自尊心が高まると、二つめとして、自分を好きになることができ、

そして三つめとして、何が問題か、どうすれば解決するかという、課題の発見・解決能力を高めることができます。しかし、それは一人じゃできないので、四つめとして、人と関わる能力、社会的にも高いことができるようになります」

新しい教科書の作成では、CDTのメンバーが日本の教科書だけでなく国外の文献なども参考にしている。

「教科書は、1コマ40分の授業の流れがわかるようにイラスト入りで作っています。冒頭にその授業の目標が書いてあり、最後にそれに対する自己評価の項目があります。先生は教科書を見れば、どのように授業を進めるか、子どもたちが何を達成できたかひと目でわかるようになっていきます」と岡出さんは話す。

すでにミャンマー全国の小学1~3年生には、CREATEが作成した新教科書を使って授業が行われている。児童たちがボール拾い競争など学年のレベルに応じたゲームを通じてルールを理解し、どのように仲間と協力すれば上手にできるかを考えながら取り組める内容になっている。新カリキュラムは、体育のほかに国語、算数、理科、社会、英語、芸術(音楽・図工)、道徳・公民、ライフスキルがある。

パデコの宮原光さんは、児童や保護者にも変化が表れているという。「子どもたちは本当に喜んでくれています。最初は不安があったようですが、授業で覚える量

で、相手と競争することが中心でした。しかし、新カリキュラムは全員参加・協力・チームワークを重視したものに変わってきています」と話す。

体育のCDTメンバーであるタン・ミン・ソーさんは自らの幼少時代をふり返り「私は幼いころ体が小さくて運動や体育は苦手でしたが、仲間に入れてもらえませんでした。ですが新カリキュラムでは誰も差別せず、できる子どもも苦手な子どもも自信を持って取り組めるような内容を考えています。今の子どもたちは全員が、一生懸命やるうとする気持ちで後押ししてもらえます。いいプログラムと出合ったことに感謝しています」と目を輝かせる。

岡出さんは、四つのことをバランスよく学べる体育であると強調する。

「私たちの体育は、技能・体力の向上」を目指しつつも、かつしてそれを第一にするわけではありません。「私はこれができる。自分分はすごいんだ」という自尊心が高まると、二つめとして、自分を好きになることができ、

そして三つめとして、何が問題か、どうすれば解決するかという、課題の発見・解決能力を高めることができます。しかし、それは一人じゃできないので、四つめとして、人と関わる能力、社会的にも高いことができるようになります」

仲間と力を合わせて、  
平和に暮らせる社会に

教師用の体育の指導書。中央に教科書の縮小版が掲載され、その周辺に「授業のねらい」「指導上のポイント」などが記されている。他の教科も同様の構成となっている。



ISHIKAWA Masayori / JICA  
**西山直樹**(にしやま・なおき)さん

カンボジアのすべての子どもたちが質の高い体育を通じて「知識・技能・態度」を学べるよう活動を継続し、このモデルを世界にも発信していきたい!

中学校の先生が自作した卓球台とラケットで実技。卓球は新しい種目のため、先生たちにも理解しやすい指導書作りが進められた。



認定特定非営利活動法人  
**HEARTS of GOLD**  
(HG)

バルセロナオリンピック(1992年)銀メダル、アトランタオリンピック(96年)銅メダリストの有森裕子さんが、96年にカンボジアで開催されたアンコールワット国際ハーフマラソンに参加したことをきっかけに、98年に発足。スポーツを通じて国境・人種・ハンディキャップを超えた「希望と勇気」の共有を実現することを目指す。2012年まで同大会の運営を支援しながら、運

営スタッフを育成。06年からはカンボジア教育省の要請により小学校体育教育支援事業を開始。17年からはJICA草の根技術協力事業にて中学校体育の支援に携わる。

【ハート・オブ・ゴールド本部事務局】  
●岡山県岡山市北区西辛川1895-7レジデンスアロー-101号室  
●TEL: 086-284-9700 ●https://www.hofg.org



プノンベン市で行われた先生たちに向けたワークショップ。初めての指導案作りを戸惑いながら進めた。



教育省の技術委員会のメンバーが日本での研修に参加し、岡山県の中学校で授業を視察。視察後には日本の教員に授業に関して質問し、指導書の活用方法を学んだ。



いろいろな  
体育の授業があって  
楽しい

人間力の向上を case2

質の高い授業で  
「知識・技能・態度」を  
身につける

カンボジアでは小学校体育に続き、2015年から中学校体育の学習指導要領、指導書が作成された。これまでとは異なる授業や新しい種目に取り組めるよう、HEARTS of GOLDが支援を行っている。

文●久保田 真理

案件名 中学校体育科教育指導書作成支援・普及プロジェクト  
2017年1月~2020年9月



授業でもっと  
こうしてみたら?

プノンベン市の中学校で教育省の担当官が先生に指導法を助言。



2019年9月に完成し、教育省大臣から承認された指導書。年間計画、単元計画、指導案を作る際に必要なことが書かれている。

工夫を重ねて  
活用される指導書を作成  
指導書作りにおいては、20種目

わって、体づくり運動、リズム運動、器械体操、陸上、水泳、ボールゲーム、伝統スポーツの7領域20種目が授業に取り入れられた。先生たちは教員養成期間に習わなかった種目を教えることに加え、指導書をもとに年間計画、種目ごとの単元計画、指導案を作成する必要が出てきたという。「中学校体育でも『知識・技能・態度』を身につけることが求められるようになり、技能面においてはさまざまな運動能力を身につける時期と位置づけられ、種目が増えました。また態度面では、自立を促すために子どもたち同士が教え合うことや、自分たちで授業を計画することが盛り込まれ、先生たちは授業の仕方を変えることになりました」と西山さんは説明する。そこで、この新しい体育の授業への理解を深めるため、17年11月には教育省の担当者が岡山県に研修に訪れ、日本の先生たちの指導書の活用方法や、授業の展開の仕方等を学んだ。

19年9月、教育省大臣の承認を受け、ようやく指導書が完成した。プロジェクト終了までは、授業の指導法に対する助言や、先生を対象にした新しい指導方法についてのワークショップを通じて普及活動に力を注いでいく。「新しい体育の授業では、状況判断をする力などが身につきます。自身の課題解決力が上がることで、道徳性の成長やこの国の経済発展につながるのではと思っています」と、西山さんはカンボジアの明るい未来を願っている。

「知識・技能・態度」を学ぶ  
新しい体育の授業

16年に中学校体育の学習指導要領がカンボジアの教育・青年・スポーツ省(以下、教育省)に認定され、それまでの単調な体操に代

他の教科より遅れていた  
中学校体育の支援へ

カンボジアでは、1976年から約3年間続いたポル・ポト政権時代に教育関係者が粛清され、教育関係の文書も残されていなかった。91年のパリ和平協定の締結以降、教育の立て直しが進められてきたが、算数や語学などの教科が優先されてきたという。「人間の発達の根幹を担う情操教育は後回し。体育や芸術などの授業が行われていない状況にありました」とHEARTS of GOLD(以下、HG)の西山直樹さんは話す。HGは2006年から16年まで小学校体育の学習指導要領と指導書の作成を支援し、小学校での体育の普及に努めてきた。これまでの経験を生かし、15年からは日本政府が主導するスポーツ・フォー・トゥモロー(SFT)プログラムで中学校体育の学習指導要領の作成を支援し、現在はJICA草の根技術協力事業として中学校体育の指導書作成と普及のプロジェクトに取り組んでいる。

\*1 全国の学校において一定の教育水準を確保するため、教育課程を編成する際の基準。  
\*2 学習指導要領の解説書。



ボールに  
負けないで!

## 2018年 キンボール

直径 122cmのボールで行うゲーム



円盤が  
柔らかいから  
安全

## 2017年 ドッジビー

布でできた円盤で行うドッジボール形式のゲーム



開講式

研修は実施することが目的ではなく、スタートだと思えます。そのためにも研修後の各国での取り組みを把握し、課題に対するさらなる研修などを地域で継続していきます。

JICAタイ事務所 浦田 憲さん

社会参加の促進を case1

# どんな障害者も 暮らしやすい社会へ

アジア太平洋地域に暮らす障害者は約4億人といわれ、彼らが社会の一員として活躍できる環境整備が続けられている。その一環として、スポーツ活動で障害者と社会をつなぐための研修が行われた。

**案件名** 障害者支援に関するコミュニティベースのインクルーシブ開発に係る知識共創フォーラム(第三国研修) 2014年~2016年  
障害多様性を踏まえたスポーツ活動を通じたインクルーシブ開発の実現(第三国研修) 2017年~2019年

開講式



# SPORTS

アジアの7か国が集合! /

## 2017年~2019年 第三国研修

社会参加を促す  
スポーツやレクリエーションを学ぶ

みんなで  
パスを回すよ!



## 2019年 卓球バレー

卓球台とピンポン球でバレーボールのように行うゲーム

## アジア太平洋地域の障害者支援の拠点 アジア太平洋障害者センター (APCD)



今日も一日  
がんばりましょう

APCDの敷地内にある「60 Plus+ Bakery & Café」では、タイ・ヤマザキ社から技術指導を受けた障害者たちが、いろいろな業務に携わっている。



バンコクにあるAPCD。日本の無償資金協力で建てられた。

Kingdom of Thailand



タイ

国名：タイ王国  
通貨：バーツ  
人口：6,891万人  
(2017年、タイ国勢調査)  
公用語：タイ語

一人当たりの国民総所得は5,960ドル(2017年)で、すでに中進国といえる。インフラ整備、産業人材の育成、気候変動対策、福祉サービスの改善などの課題もあるが、途上国の支援国としても存在感を増し、ASEAN地域の共通課題にも積極的な対応を行っている。



### 国を超えて取り組む 障害者支援

2002年、アジア太平洋地域を対象に、障害者が社会から疎外されることなく、その能力を發揮できる社会の実現に向けたJICAの技術協力プロジェクトが始まった。その一環としてバンコクに設立されたのが、同地域内の障害者当事者組織と支援組織、各国政府などが連携する拠点「アジア太平洋障害者センター(APCD: Asia-Pacific Development Center on Disability)」だ。

09年にはタイ王室が後援する財団法人となり、以降、ASEAN事務局や国際交流基金、日本財団などと連携した活動や、タイ・ヤマザキ社との協働により自閉症や知的障害のある人が働けるペーカリー事業の運営などを実施。タイ国際協力局およびJICAとの第三国研修も展開し、地域内の障害者支援で重要な役割を果たしている。

から19年に行われた第三国研修「障害多様性を踏まえたスポーツ活動を通じたインクルーシブ開発の実現」には、カンボジア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、タイおよびベトナムの障害者団体や自閉症・精神障害の当事者とその保護者など計69人が参加した。

講師には筑波大学の教員や日本の関係団体の8人を含む計35人を招き、タイなどでの事例を紹介し

### 積極性が育まれる 社会参加につながる

APCDの要請を受けて17年

こうしたなか、APCDが主体となりタイでの第三国研修「障害者支援に関するコミュニティベースのインクルーシブ開発に係る知識共創フォーラム」が14年から16年にかけて行われた。参加したのはカンボジア、インドネシア、ミャンマー、フィリピン、ベトナムおよびタイの6か国。対象となったのは、支援が行き届いていない難聴や自閉症、知的障害の人たちだ。研修は、障害者だけでなくあらゆる人が暮らしやすい社会の実現を目指すというインクルーシブ開発の考え方に基づく。参加国の支援団体の能力向上とネットワークづくりを目的に、ワークショップや現地視察などが行われた。

ながらスポーツやレクリエーション活動と障害者の能力向上の関係性を講義で学び、パラスポーツの体験も行われた。陸上、水泳、自転車など一般的な種目のほか、17年にはドッジビー、18年にはキンボール、19年には卓球バレーの体験を実施したところ、「こんな競技は知らなかったが、帰国してからもおもしろかった」と参加者からは好評だった。

「研修で参加者が生き生きとスポーツに取り組み、自己研鑽する姿を見たとき、スポーツを通して積極的な姿勢が育まれ、社会参加につながることを実感しました」と浦田さんは語る。APCDからも「3年間で研修の目標はおおむね達成したと評価しています。今後も、地域に根差したインクルーシブ開発を活動の重点分野に位置づけると同時に、障害者、障害者団体の災害対策能力強化にも取り組んでいきたい」と今後の展望が語られた。

20年1月には、研修参加者による母国での障害者スポーツ活動の状況を把握する調査が行われた。「今年はパラリンピックが開催され、障害者スポーツへの関心も高まります。研修フォローアップの結果をふまえて、研修参加国での活動を推進してほしい」と浦田さんは期待している。

スポーツで  
メリハリのある生活



スッパバンさんは、カフェで働いた後、同僚たちと一緒にサッカーを楽しむ。

**スッパバンさん**  
カフェ & サッカー



ADDPが支援している人のなかには、オリンピック・パラリンピックの選手候補になっている人もいます。そうしたアスリートだけでなく、どんな障害者もスポーツを楽しみ、仕事もできる、そんなラオスにしていくお手伝いを続けます。



中村由希(なかむら・ゆき)さん(右)  
中野枝実(なかの・えみ)さん

特定非営利活動法人NPO  
**アジアの障害者活動を支援する会**  
(ADDP)

1992年設立。東南アジアのラオスで、教育や就労の機会に恵まれず尊厳が失われている障害のある人々に、自分自身の可能性と持てる力を最大限に生かし社会の一員として自立するための支援を行う。

【アジアの障害者活動を支援する会】  
●東京都板橋区板橋3-57-5 美咲マンション1階 ●TEL: 03-6915-5545  
●http://www.addp.jp

2015年、クッキー工房で初めてダウン症の女性をスタッフとして受け入れたときに、親身になって仕事をサポートしたのもマニチャンさんだった。その様子を見た中村さんたちは、知的障害のある人もサポートがあれば十分に職場で能力を発揮できると考え、外務省のNGO連携無償プログラ

**支援される側が  
支援する側に**

「パワーリフティングを始めてから、仕事にもより一生懸命取り組みようになり、とても明るくなりました」と、中村さんは言う。

後輩たちの指導にもあたり、工房を訪れた視察者に対してクッキーの作り方や大切にしていることを自分の言葉で伝え、「これが私の仕事です」と誇りと自信にあふれる姿を見せている。自信をつけたのは仕事の面だけではない。同僚たちが車いすバスケットボールや水泳をやっているのを見て、マニチャンさんもスポーツに興味を持った。そこで始めたのが、下肢に障害があってもできるベンチプレス競技、パワーリフティングだ。終業後ADDPオフィスの1階にある練習場に通っている。「自分で設定した目標に向かって練習し、達成できたときはとてもうれしい」とマニチャンさんは笑顔で答える。「パワーリフティングを始めてから、仕事にもより一生懸命取り組みようになり、とても明るくなりました」と、中村さんは言う。

「私たちが活動を始めた頃、ラオスの障害者の多くが教育や保健、医療のサービスを受けることができていませんでした。家に閉じこもっていた彼らに出てきてもらい、社会とつながる手段として選んだのがスポーツ活動でした」とふり返るのはアジアの障害者活動を支援する会(ADDP)の中村由希さん。会の活動は、障害のある人に声をかけ、車いすバスケットなどのスポーツに誘うことから始まった。「はじめは『こんなことできないよ』と消極的だった人も、続けていくうちにうまくなり、積極性や自信が生まれてくるのがわかりました」と中村さん。そんな人たちのなかから「自立して生活したい」「仕事をしたい」という声が上が

「仕事をした」という声が上がると、就労支援の活動も開始した。日本から専門家を招いたクッキーやパン作り、車の修理、美容、農業、清掃などの職業訓練を行ってきた。

「仕事にもスポーツにも自信をつける」  
クッキー工房「マルシェ・ド・ラオ」のチーフとして働くマニチャン・チャンタボンサさんは、ADDPによる製菓の職業訓練を受けた第1期生だ。マニチャンさんは下肢に障害があり、おとなしい性格だったが、レシピに忠実にクッキー作りに取り組み、工房のリーダー的存在になっていく。



集中できるところが好きです!

**マニチャンさん**  
クッキー作り  
&  
パラ・パワーリフティング



クッキー工房の仲間たちと。前列左端がマニチャンさん。

「マルシェ・ド・ラオ」のクッキーは空港などでも販売され、ラオスの土産として人気。



社会参加の促進を case2

**仕事とスポーツで  
自信をつける**

ラオスで20年以上にわたり障害者支援を行ってきたアジアの障害者活動を支援する会(ADDP)。スポーツと就労支援の両輪で、障害者の意欲を高めている。

しっかりと  
混ぜてね



マニチャンさんが初めてクッキー作りを教えたダウン症のスタッフ。



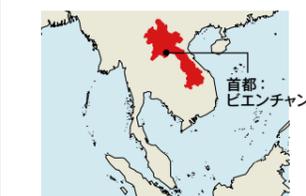
知的障害のあるスタッフにクッキー作りを指導するマニチャンさん(右)。



ラオス

国名: ラオス人民民主共和国  
通貨: キープ  
人口: 約706万人(2018年、世銀)  
公用語: ラオス語

インドシナ半島の内陸国。面積は日本の本州とほぼ同じ。国土の約70%が高原や山岳地帯で「森の国」と称される。気候は熱帯性モンスーンで雨季と乾季に分かれる。1975年、ラオス人民革命党が王政を廃止し、ラオス人民民主共和国を無血で樹立した。



「やばい」——そう思った次の瞬間、体は地上5〜6メートルの高さを飛んでいた。バイクによる単独事故。時速140キロでプロック塀に衝突して下半身の自由を失った。1986年、16歳のときだった。

「もう生きていけない」。居場所のない社会に戸惑い、後ろ指をさされることも少なくなかった。やり場のない不満を募らせ、家に閉じこもる生活は2年続く。失意から救ってくれたのは車いすバスケットだ。

「人生が劇的に変わりました。他の障害者と交流するなかで学校に行く手立てを覚えてもらい、就職もできました。スポーツを頑張ったことで少しずつ前向きに生きられるようになったのです」と、神保康広さんは当時をふり返る。

その後の実績は目覚ましい。6度の全国制覇に4度のパラリンピック出場。30歳のときに渡米し、全米選手権での優勝も経験した。活躍の陰には友人や先輩たちの存在があった。「ふさぎ込んでいた私に車いすバスケットを熱心に勧めた友人や、お金も車もない当時、練習の送り迎えをし、車いすを譲ってくれた先輩など、多くの方々の支えがありました」。だからこそ「自分がしてもらったことを

伝えたい。選手たちは飛躍的に成長し、現在では経営者になった人や、以前は周囲が許さなかった結婚をした人もいる。

**いつかまた東南アジアへ**

協力隊の生活は充実していたが、個人での活動には限界も感じた。「いつか必ず帰ってくる」。そう約束し、次なる挑戦に選んだのが車いすの企画・開発だ。松永製作所に入社すると、スポーツ用の「MPシリーズ」をゼロから立ち上げ、今日に至るまでブランドを育ててきた。最大の特徴は「セミアジアスト」といわれるフレームだ。車いすバスケットの試合では、選手同士が激しくぶつかり合うため車いすが壊れることも多いが、セミアジアスト車では壊れた部分を数分で交換でき、また溶接で固められていないフレームは適度にしなり高いターン性能を発揮する。

これがヒットした。16年のリオ大会では日本代表選手8人が松永製作所の車いすを採用して知名度を上げ、18年に欧州市場へ進出。イギリスチームにMPシリーズを提供し、翌年の欧州選手権で男子が優勝、女子が準優勝をしたことで海外からの注文も大きく伸びた。開発に着手してからおよそ10年。長い道のりだった。

途上国の障害者の自立を支援したいという思いは今も変わらない。

現在はオリンピックピック・パラリンピック後を見据え、東南アジアでの事業を計画している。「マレーシアでは、修理されずに放置された車いすをたくさん見ました。障害のある方に技術を伝えて修理工場を造り、さらに車いすバスケットの普及もできれば、仕事とスポーツの両面から自立を後押しできると考えています」。

実は一度マレーシアに進出して、「気持ち先走って大失敗」した過去がある。小さな市場でビジネスと社会貢献を両立させる難しさもある。しかし簡単には諦めない。「なんでもできることを証明する」——これからの道を進んでいく。

「仕事を通じて社会貢献を目指します！」

**松永製作所 神保康広(じんぼやすひろ)さん**  
1970年生まれ、東京都出身。18歳のときに車いすバスケットボールを始め、92年バルセロナから2004年アテネまで4大会連続でパラリンピックに出場。06年、青年海外協力隊としてマレーシアに派遣。現在、松永製作所でスポーツ用車いすの海外市場を担当するとともに、製品企画・開発に従事する。



仕事を通じて社会貢献を目指します！

**松永製作所 神保康広(じんぼやすひろ)さん**  
1970年生まれ、東京都出身。18歳のときに車いすバスケットボールを始め、92年バルセロナから2004年アテネまで4大会連続でパラリンピックに出場。06年、青年海外協力隊としてマレーシアに派遣。現在、松永製作所でスポーツ用車いすの海外市場を担当するとともに、製品企画・開発に従事する。

**「スポーツは身を助けるというのは本当にそう。仕事をしながら、同じような境遇の子たちを支援し続けたい」**

松永製作所はイギリス代表チームのオフィシャルサプライヤー。神保さんは整備士としてチームに同行することも。



「後輩たちに伝える自立」

「人生が劇的に変わりました。他の障害者と交流するなかで学校に行く手立てを覚えてもらい、就職もできました。スポーツを頑張ったことで少しずつ前向きに生きられるようになったのです」と、神保康広さんは当時をふり返る。

その後の実績は目覚ましい。6度の全国制覇に4度のパラリンピック出場。30歳のときに渡米し、全米選手権での優勝も経験した。活躍の陰には友人や先輩たちの存在があった。「ふさぎ込んでいた私に車いすバスケットを熱心に勧めた友人や、お金も車もない当時、練習の送り迎えをし、車いすを譲ってくれた先輩など、多くの方々の支えがありました」。だからこそ「自分がしてもらったことを

後輩たちに伝える」ことが引退後のテーマになった。

転機となったのは、2006年に青年海外協力隊として渡ったマレーシアでの経験だ。派遣の目的は代表チームの指導だったが、そこで見たのは「現地の障害者ばかりの自分と同じ苦しさを抱えている。能力を発揮する場所がなく、社会から隔離されている。なにより、自立のための気力が削がれていました」。

神保さんはコーチという立場を超えて選手たちに寄り添った。「この国に障害者の存在を知らせ、なんでもできることを証明するのは彼らアスリートだ」。発奮を促すべく、練習では厳しいメニューを自らやって見せ、コートの外では挫折から立ち直った自身の経験を



2004年アテネパラリンピックに出場。日本チームは8位に入賞した。

人や地域と交流を case1

**心に火をつけたい。車いすで支える自立**

神保康広さんは車いすバスケットボールの元日本代表。現在、スポーツ用車いすの企画・開発に携わる一方で、パラスポーツの普及など社会貢献活動を行っている。原動力となっているのは、障害者としての経験だ。



選手にアドバイスする神保さん。豊富な経験を生かしてミリ単位で車いすを調整する。

スポーツがみんなの活力になる



マレーシアで車いすバスケットの普及と代表チームの指導に従事。車いすを使用する青年海外協力隊員の派遣は神保さんが初めて。

パラスポーツを世界へ



現在も仕事の合間を縫って社会貢献活動が続いている。2015年と16年の2度にわたってジンバブエで普及活動を行った。



人や地域と交流を case2

# 世界とつながるニッポン

日本の地方自治体がオリンピック・パラリンピックに参加する国や地域のホストタウンとなり、大会前からスポーツや文化、経済などを通じた交流を行っている。



前橋によろこそ!

2月に開かれた地元の幼稚園での交流会。子どもたちが選手たちと徒競走やレクリエーションを楽しんだ。



長期合宿にはコーチ1名、パラ選手1名、女子選手1名、男子選手2名の計5名が参加。「大会で結果を出して母国に希望を与えたい」と意気込む。



研修生が中学校を訪問し、技術科の授業に参加。一緒に木工作業を行った。



いい泳ぎだったね

事前キャンプでパラオの水泳ナショナルチームの選手と市内の小学生が交流。



パラオで環境ワークショップを実施。パラオの小学生がオリジナルエコバッグを作った。



南スーダン × 前橋市 [群馬県]  
**市民が一つになって選手たちを応援!**

文●松井 健太郎



1月4日、亀泉町の餅つき大会に参加。地域の人たちと餅つきを楽しんだ。



パラオ × 常陸大宮市 [茨城県]  
**未来につながる交流のスタートに**



茨城県常陸大宮市とパラオとの交流は、第2次世界大戦の戦死者遺族らが慰霊に訪れた時から始まり、70年以上にわたりに続いている。そうした背景から2016年にパラオのホストタウンに登録され、

前橋市はホストタウンとして、オリンピック・パラリンピックに出場予定の南スーダンの4名の陸上選手とコーチ1名を、2019年11月から長期合宿のかたちで受け入れている。一般的に選手団の受け入れは選手村に入村する1〜2週間前からだが、紛争が続く南スーダンでは選手の練習環境が整わないことから、同市の山本龍市長が来日の前倒しを提案。「JICAが南スーダンで取り組む『スポーツを通じた平和促進』に前橋市も寄与できるなら」と、長期合宿が実現した。

長期の受け入れには資金も必要だ。市では、多くの人々からの応援を期待してふるさと納税を活用。選手たちのトレーニングや滞在費用を募り、1300万円以上（3月5日現在）の寄附が集まった。選手には前橋市陸上競技協会から4名のトレーニングコーチがつ



市民のトレーナーと通訳が練習を常時サポートしている。男子1,500mに出場するアブラハム選手は「専門的な指導を受けるのは初めてで、感謝している」と話す。

大会後も、人的、文化的な交流を検討していきます!



有志団体が製作した応援Tシャツを手にする桑原さん。売上金は市に寄附される。

前橋市へのふるさと納税はこちら  
「ふるさとチョイス ガバメントクラウドファンディング®」



き、23名の通訳ボランティアとともに無償で指導やアドバイスを実施。練習が行われる玉山運動場では、近隣の中学や高校の陸上部の生徒と声をかけ合ったり、一緒に写真を撮ったりしている。女子100メートル走に出場予定のモリス・ルシアさんは同じ高校生の陸上部員と友達になり、メールでやり取りする仲になっているそうだ。

休日には町内の餅つき大会に参加したり、小学校を訪問して子どもたちとふれあったりするなど地域の人と交流する機会も多い。「生まれたときから紛争状態にある選手たちですが、悲しみや苦しみを背負いつつも、前橋で一生涯懸命練習に打ち込んでいます。そんな姿を目にする市民にとっても、平和や多様性について考える貴重な機会になっています」と前橋市スポーツ課課長の桑原和彦さんは、選手たちの活躍に期待している。



パラオで行われた日本フェアでは、常陸大宮市の伝統和紙「西ノ内紙(にしのうちし)」を使ったぶんぶんゴマ作りを実施した。



茨城県常陸大宮市 政策審議室 企画政策課 東京オリパラ推進室 本多美月(ほんだ・みつき)さん(中央)

日本について学びながら選手団のサポートも担う研修生の受け入れや事前キャンプの誘致、両国の交流イベントなどを行っている。

JICA 海外協力隊員としてパラオで陸上競技のナショナルチームのコーチを務めた本多美月さんは、その知識と人脈を買われ、19年9月から同市の職員としてホストタウン事業に携わっている。配属先の関係機関だったパラオ・オリンピック委員会との連絡調整や、テレビ電話を活用した小学生同士の交流などに取り組んできた。

そのなかで感じたのは、相手への理解を深めることが20年以降の両者の関係深化につながるということ。研修生と一緒に、常陸大宮の魅力をパラオへ発信するフェイสบックを開始した。一方でパラオをよく知る人を招いたセミナーを3回開催。最後の回では同市とパラオの継続的な交流について考

える機会を設けた。「それぞれの伝統工芸による技術交流や廃校を利用したパラオ交流館の開設などの意見が出て、とても盛り上がりました」と本多さんは語る。

今後は、大会直前のトレーニングの受け入れや選手団との交流、応援PRなどのパラオ応援キャンペーンを行う予定だ。「以前、常陸大宮市で選ばれた市民ランナーが、パラオで開催されたランニングイベントに参加しました。言葉が通じなくてもおたがいを尊重、尊敬し、走り終わった後に握手し合う両国の選手の姿にスポーツの可能性を感じました。今回のホストタウン事業でも、スポーツを起点にパラオと常陸大宮の市民同士の交流が生まれている。「おたがいを身近に感じることで、今の子どもたちが大人になる未来にまで続く交流を、20年以降も多面的に進めていきたいと思っています」。

## おもなSDGs目標に対するスポーツの役割

スポーツは、SDGsを達成するための手段として貢献することができる。  
ここでは、スポーツがその役割を果たすSDGsの目標をピックアップして紹介。



あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ



飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保とともに、持続可能な農業を推進する



あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する



すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する



ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る



すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワークを推進する



国内および国家間の不平等を是正する



都市と人間の居住地を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする



持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する



持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化化する

\* 働きがいのある人間らしい仕事



タンザニアで初めて行われた女子陸上競技大会の様子。

スポーツが途上国の開発にどのよう  
に貢献するのか、具体的にみてい  
きましょう。おもに健康の増進、保  
健・衛生啓発、非認知能力の獲得  
やコミュニケーションの能力の育成  
などがスポーツで実現できるといわ  
れています。

スポーツとジェンダーの関係も興  
味深いテーマです。たとえば100  
メートルを男女同時に一緒に走ったら、  
それは平等なんでしょうか。性差に  
よる区別があつていない場合とそうで  
ない場合があるのです。スポーツを  
通すことで見えてくるジェンダーの  
あり方が、人間開発におけるジェン

**長期的な視点で  
取り組むことが大切**

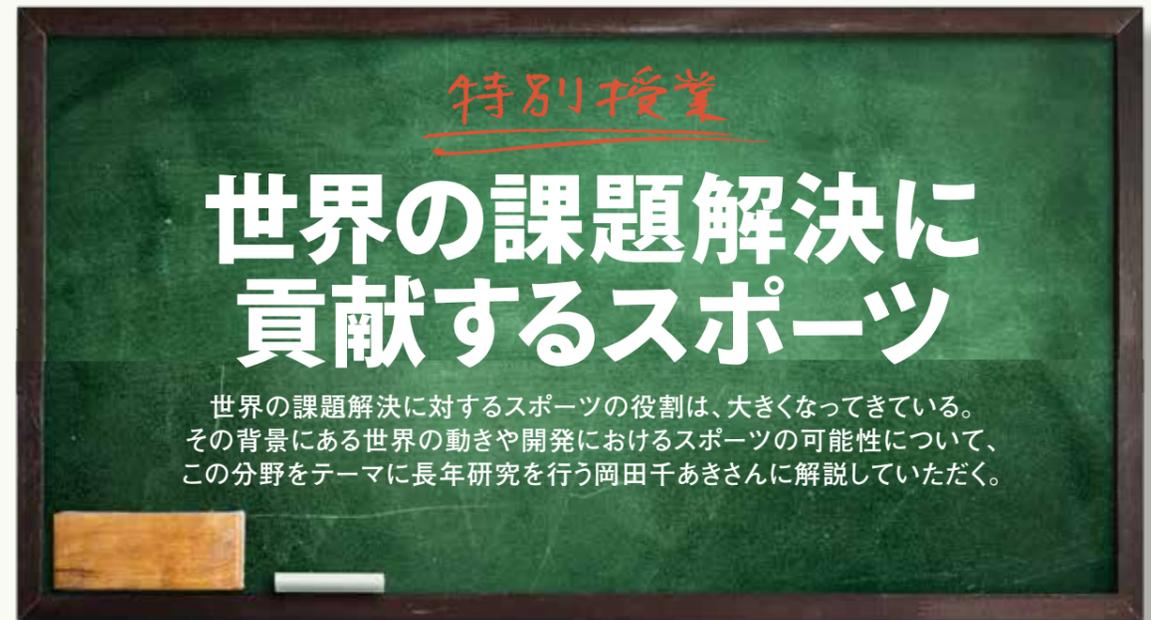
スポーツが途上国の開発にどのよう  
に貢献するのか、具体的にみてい  
きましょう。おもに健康の増進、保  
健・衛生啓発、非認知能力の獲得  
やコミュニケーションの能力の育成  
などがスポーツで実現できるといわ  
れています。

ダー課題を考えるきっかけになる可  
能性が十分にあると思います。

スポーツは文化が反映されるもの  
です。そのため成果として表に出る  
部分が華やかに見えても、裏では複  
雑な問題が絡む面もやっぱりありま  
す。地域内紛争により復興支援が  
必要な紛争後の地域では、勝ち負  
けを決めるのかというだけでも  
すんなりといかずルール調整も大変  
です。ですがスポーツには、援助・被  
援助の関係を超えて一緒にプロジェ  
クトを進めることができるよさがあ  
ります。現地の参加者たちは生き  
生きとした笑顔になりますし、成果  
が見えやすく達成感を共有できる  
という特徴もあります。

途上国でのスポーツを通じたプロ  
ジェクトは、開発課題の解決や平和  
構築に対して直接的に貢献するこ  
とはなかなか難しいかもしれませんが  
だからこそ、長期的な視点で活動  
を続け、効果をとらえていくことが  
必要なのです。

15年の国連持続可能な開発サ  
ミットで採択された「持続可能な開  
発のための2030アジェンダ」(以  
下、2030アジェンダ)では、ス



# 特別授業 世界の課題解決に 貢献するスポーツ

世界の課題解決に対するスポーツの役割は、大きくなってきている。  
その背景にある世界の動きや開発におけるスポーツの可能性について、  
この分野をテーマに長年研究を行う岡田千あきさんに解説していただく。

### 世界に広がった 新たな認識

スポーツと開発をめぐる世界的  
な動きが活発になったのは、  
2000年ごろからといわれてい  
ます。この年に国連ミレニアム・サ  
ミットで合意された「ミレニアム開  
発目標(以下、MDGs)」で、途  
上国の経済成長を目指す経済開発  
だけではなく人間開発にも力を入  
れていこうという潮流が生まれまし  
た。人間開発とは、人が自分の可能  
性を開花させたり、創造的な人生  
を築ける環境を整備すること。  
GDPや国民所得ではなく、人  
間の生活の質が重要なのです。

それ以前からスポーツは、途上国  
の開発プロジェクト内で啓発活動や  
保健衛生教育を行ったりする際の  
手段として使われていたものの、ス  
ポーツそのものが大きなプロジェク  
トの柱となることはありませんでし  
た。でも、人間開発に焦点が当てら  
れたことによってスポーツも開発の  
手段であるという認識が広がり、二つ  
の分野として確立されていくことにな  
ります。それが、「開発と平和の  
ためのスポーツ」(S.D.Sport for  
Development and Peace)と呼  
ばれる分野です。

大阪大学大学院人間科学研究科 准教授  
岡田千あき(おかだ・ちあき)さん



開発と平和のためのスポーツ、コミュニティ開発、生涯スポーツを研究テーマとし、ボスニア・ヘルツェゴビナ、カンボジア、南スーダン、タンザニア等での調査・実務経験を持つ。おもな編著作は、『スポーツと国際協力』(大修館書店、2015)、『スポーツで薛く平和の種』(大阪大学出版会、2020初夏刊行予定)など。

**1978年**  
ユネスコ(UNESCO:国際連合教育科学文化機関)が「体育とスポーツに関する国際憲章」を宣言。スポーツと体育は基本的人権であると世界で認識される。

**出典** 体育とスポーツに関する国際憲章/ユネスコ  
体育・スポーツの実践は、すべての人にとって基本的権利である。

**2015年**  
国連持続可能な開発サミットの成果文書「持続可能な開発のための2030アジェンダ」でSDGsが示される。さらに持続可能な開発におけるスポーツの重要性が明記される。

**出典** 持続可能な開発のための2030アジェンダ 37項/国連(外務省訳)  
スポーツもまた、持続可能な開発における重要な鍵となるものである。我々は、スポーツが寛容性と尊厳を促進することにより、開発及び平和への寄与、また、健康、教育、社会包摂的目標への貢献と同様、女性や若者、個人やコミュニティ能力強化に寄与することを認識する。

**2015年**  
ユネスコの「体育とスポーツに関する国際憲章」が大幅に改訂され、SDPに関する条項が新たに設定される。

**2001年**  
国連事務総長が、開発と平和のためのスポーツ(SDP)分野の国連事務総長特別顧問を初めて任命する。

**2000年**  
MDGsが合意され、その達成のためにスポーツがどのように貢献できるのかについて世界中で議論され始める。

**2017年**  
ロシア・カザンで第6回体育・スポーツ担当大臣等国際会議が開催。そこで「カザン行動計画」が採択される。その中で、「スポーツの持続可能な開発と平和への貢献を最大化する」ことが主要政策領域の一つとなる。

## 開発と平和のための スポーツを取り巻く世界の動き

出典: 独立行政法人日本スポーツ振興センターのプレスリリースをもとに作成。

\*2 MDGsが2015年で終了することを受けて採択された、15年から30年までの長期的な開発の指針。  
\*3 Sustainable Development Goals: 「誰一人取り残さない」をスローガンに、格差や貧困、環境破壊など、世界が直面している問題の根本的な解決を目指す17分野の国際目標。

\*1 Millennium Development Goals: 極度の貧困と飢餓の撲滅など2015年までに達成すべき八つの目標を掲げた開発分野における国際社会共通の目標。



# JICA海外協力隊 がゆく Vol. 17

野球を通じて、メキシコの子どもたちの心身の成長を手助けする隊員の活動を紹介します。

in メキシコ

## 金澤達記

かなざわ・たつき 24歳  
出身地：兵庫県 職種：野球  
任期：2018年10月～2020年10月



コミュニティの人たちと一緒に  
野球の楽しさを  
伝えています

6歳から野球を始め、教育実習などで野球指導の経験も積んできました。大学在学中に世界野球機構が主催するマレーシアでの野球ボランティア活動に参加。そのとき世界には野球の指導を受けたい子どもがたくさんいるのに、正しい指導スキルを持つ指導者が少ないことを実感しました。

州オメアルカ市から、子どもたちの健全な心身の成長をサポートする野球指導者がJICA海外協力隊として要請されていることを知って応募。派遣が決まりました。2018年から同市市役所のスポーツ振興課に配属され、現在は地域の野球チームと小学校への巡回指導、障害のある子どもに向けた親子運動教室などを行っています。



しっかり  
構えよう!

小学校での野球指導の様子。体育の授業として、男子も女子も一緒にプレイする。



障害のある子どもたちとの運動教室で、日本の幼児番組で人気のダンス「エビカニクス」を一緒に楽しんだ。



体は  
ボールの正面に

コミュニティの野球チームで子どもたちにボールの取り方を教える金澤さん(右端)。

### メキシコ事務所からひとこと

近隣地域に派遣されていたJICA海外協力隊の活動を聞いたオメアルカ市の副市長が、子どもたちの成長に日本の若者の力を貸してほしいとJICAに要請したことが、金澤さんの派遣につながりました。金澤さんは野球に対する地元の考え方や技術を取り入れながら、子どもたちに合った指導を行っています。地元のほとんどの人に知られていて、家族のように愛される存在です。



企画調査員(ボランティア事業)\*  
小島聡成(こじま・としあき)

\*隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。また相手国の要望を調査して要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を行う。

### +one information

## 多彩な具材が癖になるタコス

メキシコでの生活が決まったとき、食べることが大好きな僕の頭に浮かんだのは、日本のおいしいお米や新鮮な野菜、和食が食べられなくなる、という食事への不安でした。しかしメキシコで暮らしてはや1年3か月。苦手だと思ふメキシコ料理に出合ったことはなく、すべてがおいしいんです!

メキシコ料理は、アステカ族やマヤ族などの先住民の料理がスペイン料理の影響を受けて成立したといわれています。多くのメキシコ人がよく食べるのが、つぶしたウモロコシで作った生地を薄く焼いたトルティーヤです。トルティーヤ料理はたくさんありますが、私が一番好きなのは、肉や野菜を挟み、好みでライムを搾って食べるタコス。具材は牛・豚・鶏・羊の肉や野菜・卵など多彩です。なかには牛の脳みそ、頭、内臓など、日本ではあまり食べない部位が具材になっているものもあり、最初は驚き、少し戸惑いましたが、いざ食べてみるとこれがまた癖になる味でとてもおいしいんです。

そんなタコスに欠かせないのが、サルサと呼ばれる辛いソースです。どこのお店にもサルサバルデ(緑色のトマトを使ったサルサ)とサルサロハ(赤いトマトを使ったサルサ)が置いてあります。店ごとに材料が異なり、ハバネロをふんだんに使ったサルサは辛さのレベルが違うので要注意です。初めてハバネロのサルサをかけたときには、本当に口から火が出そうでした。サルサは一度少し手にのせて味見してからタコスにかけるのがいいようです。

タコスもサルサも家庭やお店、地域によって味が違います。メキシコにいらしたら、ぜひ本場のおいしいタコスを食べ比べてみてください。(金澤達記)



イラスト●さかがわ成美

になりました。私の任期が終わっても、野球チームの活動が継続できると感じています。現在市内に子どもたちの野球チームは10あり、約150人が野球を楽しんでいます。これまでに2度、オメアルカ市少年野球大会を開催。さらに市内で選抜チームを作り、ほかの市のチームと試合も行いました。

チームワークや協調性などを育むことができる球技の楽しさ、達成感などを、残りの任期いっぱい、子どもたちに伝えていきます。

地域ではスポーツが子どもたちに及ぼす好影響を保護者に説明して野球チームを作り、できるだけ練習を見に来てくれるようにお願いしました。最初、ほとんどの子どもたちはキャッチボールもできない、ルールもよくわからない状態。それでも野球を楽しむ姿を見て応援する保護者も増え、野球経験者が指導を手伝ってくれるよう

## 研修経験者の声

右：多様な参加者とのつながりも財産に。下：SDGsについて学ぶ授業。



2017年度教師海外研修、開発教育指導者研修受講  
2018年度開発教育指導者研修受講  
愛知県弥富市立弥富北中学校 理科  
濱田蒼太(はまだ・そなた)さん



### 授業で活用できる手法を習得

先輩教師に教わりながら国際理解教育に取り組むうちに、「現地に行かなければわからないことがある」と教師海外研修に参加。また指導者研修では、パラグアイでの経験を授業に生かすため参加型の指導法をはじめ、授業のデザインや進め方を学びました。

今は総合的な学習の時間で国際理解教育を行うほか、SDGsを軸にデザインした教科授業を

行っています。担当教科は理科なので、プラスチックを学習する単元で、海洋プラスチックごみ問題に結びつける授業を行いました。開発教育や国際理解教育には必ずしも正しい答えがあるとはかぎりませんが、自ら考え、判断することが大切。それは理科の授業にも生きていると感じています。授業を通して、答えは自分の中にあることに気づいてほしいです。

### 学びを生かして授業を

先輩教師から教師海外研修を紹介され、パラグアイを訪れました。パラグアイの人たちは「テレレ（冷水でいれるマテ茶）」を通じた家族団欒をとっても大切にしている、豊さとは何かを考えるきっかけとなりました。

帰国後は、同僚の教師の協力を得て、日本と世界の相互依存の関係に気づき、国際問題を自分ごととしてとらえられるよう「日本と世界のつながり」についての授業を1年生全クラスで実施しました。私が授業案を作成して、教師間でしっかりと打ち合わせをしたうえで、各担任が実際の授業を行いました。世界とつながることのよい面と悪い面を表す相関図を描くワークは、教員からも「むずかしいね」という声が出ましたが、「いろいろなことを知ることがおもしろかった」という感想もありました。今後にもつなげていきたいと思えます。



2019年度教師海外研修、開発教育指導者研修受講  
愛知県立熱田高等学校 英語  
横井美月(よこいみつつき)さん



上：パラグアイで小学校を訪問。  
左：学年の全クラスを集めてパラグアイについて紹介する授業を行った。



困、働き方、ジェンダーなどさまざまなテーマの授業実践が紹介さ

### 授業での多様な実践を発表

次は、指導者研修参加者も含めた39人によるポスターを使った実践授業の紹介が行われた。指導者研修では、開発教育や国際理解教育を実践するための課題設定の方法、子どもたちに興味を持たせるための参加型プログラムの体験、授業作りの練習などが行われる。そのうえで、それぞれが学校の授業などで実践し、再度その結果を持ち寄って成果や課題を共有する。食品ロス、スポーツ、ごみ、貧

困、働き方、ジェンダーなどさまざまなテーマの授業実践が紹介さ

「日本人というだけで信頼してくれる」という協力隊員の言葉の背景には、多くの日系人や日本人によるパラグアイでの誠実な協力があることも知った。「日本との違いや共通点から学ぶことがたくさんあった。この経験をもとに、日本の子どもたちを世界とつなぐたい」と研修参加者は締めくくった。

次は、指導者研修参加者も含めた39人によるポスターを使った実践授業の紹介が行われた。指導者研修では、開発教育や国際理解教育を実践するための課題設定の方法、子どもたちに興味を持たせるための参加型プログラムの体験、授業作りの練習などが行われる。そのうえで、それぞれが学校の授業などで実践し、再度その結果を持ち寄って成果や課題を共有する。食品ロス、スポーツ、ごみ、貧

最後は、四つの分科会に分かれて指導者研修で考案したワークショップを体験した。環境、人権、食料問題などをテーマに、みんなが考え、共有し、さらに発展させていく過程では、しだいに熱が入っていった。

最後は、四つの分科会に分かれて指導者研修で考案したワークショップを体験した。環境、人権、食料問題などをテーマに、みんなが考え、共有し、さらに発展させていく過程では、しだいに熱が入っていった。

最後は、四つの分科会に分かれて指導者研修で考案したワークショップを体験した。環境、人権、食料問題などをテーマに、みんなが考え、共有し、さらに発展させていく過程では、しだいに熱が入っていった。

### パラグアイでの体験を報告

開発教育の中核となる指導者の育成と指導者間のネットワークづくりを目的としたJICA中部の開発教育指導者研修(以下、指導者研修)。対象は教員や教育委員会・自治体・NPO・NGOなどの職員、JICA海外協力隊経験者などで、講義やワークショップ(参加型学習)を通して実践の手法を学ぶ。教師海外研修(以下、海外研修)は途上国での約2週間の研修で、その経験を生かした帰国後の授業の実施および成果の報告までが含まれている。

研修には毎年多くの教育関係者が参加しており、その成果を共有する報告会も開催されている。2月16日、なごや地球ひろばで行われた「開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2020」を紹介する。

# 世界につながる教室⑨ 研修の成果をみんなでシェア 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2020

JICAは教員などを対象に開発教育・国際理解教育の研修を行っている。研修での学びや授業実践の報告会が名古屋で開催された。

## 教師海外研修報告



フォーラムの冒頭では、海外研修参加者がパラグアイの学校や暮らしを紹介。

## 成果を解説

同学年の先生方に協力してもらいました



教師海外研修後に行った授業について説明する横井さん(左ページ参照)。

国内各地での教師海外研修情報はこちら



## 実践体験ワークショップ



左：スポーツをテーマにしたワークショップでは、「オリンピックにSDGsを掲げなかったら」をテーマにし、想定されることをみんなで書き出した。右：理想的な食の風景を絵に表し、発表し合った。



フィジーの夕日。かつてこの海を渡ってきた  
"カヌーピープル"と呼ばれる人たちが先住民の先祖だ。

# Republic of Fiji

EARTH GALLERY Vol.139 [フィジー共和国]

地球ギャラリー  
写真文・村上志緒 (植物学研究者)

# 未来へ 薬箱を託す



ココヤシを採るために木に登る青年。  
食糧のほか、さまざまなフィジアンメディスンの材料となる。



ヒーラーによるボンボ(マッサージ)。  
いくつかの薬草を抽出したココナッツオイル、ワリワリサルワキを使う。



マメ科セコウラの木。クリスマスの頃に咲くので  
クリスマスツリーフラワーと呼ばれている。



都市部のカヴァマーケット。コショウ科カヴァは、  
フィジーの嗜好飲料で日本の酒のような存在。  
根を乾かし、砕いて、水で溶いて飲み交わす。

**KORO ISLAND**  
Phone: 331 1126 Mobile: 096 0749



ココヤシから搾ったミルクにハーブを入れて  
5時間ほど熱したらワリワリサルワキのでき上がり。



ハーブを乾かすための棚。



ワリワリサルワキに入れるイランイランの花。



潮が引くと海藻を採りに行く。



ラケンバ島を一周できるメインストリート。

着陸間近の飛行機の窓から島々を包む美しい珊瑚礁が見え始め、次第にココヤシの森の緑を湛<sup>た</sup>えるフィジーの島々が迫ってくる。2009年から続く私のフィジー行きの目的は薬用植物の調査であり、このときからフィジー人（フィジアン）の友人たちとおつきあいが始まった。330あまりの島々から成るフィジー共和国は、全部の島を足しても日本の四国ほどの国土面積だ。そこに約90万人のフィジアンが暮らしている。人口の約半分は先住民（フィジー語で「Tautai」：イタウケイ）、そして40パーセントは1970年までの約100年間にわたる英国統治時代にサトウキビやタバコ産業などの働き手として入ったインド系のフィジアンである。

この地を最初に踏んだのはカヌーピールと呼ばれる人々だ。カヌーピールとは数千年前の地図もない時代に、独自の航海術で南太平洋をカヌーに乗って渡った人たちのこと。起源は東南アジアと言われている。星を見て、風を感じながら海原を進み、フィジーやサモア、トンガ、タヒチなどの島々に住み着き、最終地点は北半球のハワイ、そして南米大陸の東、イースター島といわれている。あるときフィジアン<sup>の</sup>友人に彼のタトゥーのストーリーを説明してもらったことがある。「これが太陽、これが海、これは戦う槍、守らなくてはならない僕たち

の村、そしてこれは「we are Pacific Islanders」という意味さ！」。フィジアンはイタウケイとしての誇り、それぞれの島に対する誇りとともに、太平洋を仲間たちと渡った人々の子孫としての誇りも強く持っている。

行く先にどれだけ長い航海が待っているのかわからぬ旅に出たカヌーピールは、航海中の健康と次世代のために、暮らしに必要な植物50〜60種類をカヌーに積み込んだ。これらの植物はカヌープランツといって、航路に沿って広がり、人々とともにそれぞれの地に根付いていった。その多くは、今もワイ・ヴァカ・ヴィチといわれるフィジーのハーバルメディスン（植物療法）として人々の生活に欠かせないものとなっている。

私が薬用植物調査のフィールドにしているラケンバ島は、首都スバから週に1度の小型機で2時間弱、船で1日半ほどの離島である。そこには大地を素足で踏み、海とつながるたくましい人々の暮らしがある。私のフィジアンメディスン（フィジーの植物療法）の先生であるネーナ（お母さん）が住んでいるヴァカノ村は、今でも電気は一日のうち夕方1時間半ほど通るだけで、喉が乾いたらペットボトルの水ではなくヤシの実から果汁を飲み、夕食のお魚はお父さんが海に獲りに行き、ヒーラー（治療家）にマッサージをしてもらったらタロイモ4本で

お礼する生活が成り立っている場所だ。村での暮らしは、電気に照らされるより太陽の光を浴びること、家の隙間から入る風が連れてくる花の香りを喜ぶことが健やかな幸せだと教えてくれる。

ハーバルメディスンの文化は、受け継ぐことと新しく産むことの二つの要素で成り立っている。フィジーでは母から子へ、大人から子どもへと伝承され、体温が伝わり息遣いを感じるようなつながりを持つ彼らの生活そのものが反映されている。太陽のような友人たちが同じ地球上で植物の力と人間の知恵で編み上げられたハーバリズム（ハーブ文化）を継いでいる姿は、私たち人類にとって根本的に大切なことを教えてくれている。

そんなフィジーも変化の時を迎えている。首都にはカフェやショッピングモールができて、島の暮らしにもスマホやインターネットが入り込み、電気やお金が必要な時代に移りつつある。それを目の当たりにしながらも、豊かな時間の使い方が続いて、フィジーの未来を築く若者や子どもたちが太陽のような笑顔を持ち続けてくれることを願う。

#### 村上志緒（むらかみしお）

植物療法研究家、株式会社トラボ代表、薬学博士、理学修士。植物療法学（民俗薬草文化、作用機序、特に向精神作用）を研究。日本、ネイティブアメリカン、そして南太平洋フィジーのハーブが研究テーマ。著書に『日本のハーブ事典』、『日本のメディカルハーブ事典』（ともに東京堂出版）など。

トラボ <https://www.tolab.com>

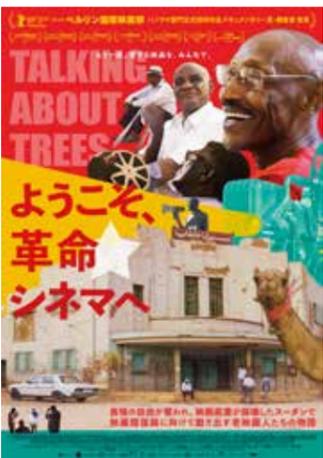


左：ココヤシの実を削るネーナ。右：クワ科マシの樹皮で作るタバ布に模様を染める。大人がハーブを扱う様子を見て子どもたちは育つ。



## 映画の新着情報

### 『ようこそ、革命シネマへ』



●『ようこそ、革命シネマへ』  
2019年/フランス、スーダン、ドイツ、チャド、カタール/97分  
配給: アニモプロデュース 監督: スハイブ・ガスマレバリ

4月4日(土)よりユーロスペースほか  
全国で順次公開。

公式サイトは  
こちらから



© AGAT Films & Cie - Sudanese Film Group - MADE IN GERMANY Filmproduktion  
- GÖI-GÖI Productions - Vidéo de Poche - Doha Film Institute - 2019

本作は、「映画をふたたびスーダンの人々のもとに取り戻したい」というスローガンのもと、一夜限りで映画館を復活させるために奔走する姿を描いたドキュメンタリー。国外で映画を学んでいた4人の男性たちは、スーダンで映画を製作して自国に映画文化を根づかせようとするが、軍事独裁政権により言論の自由は奪われ、映画は上映禁止処分となった。それから20年もの歳月が経ち、還暦を過ぎた4人は再会する。さまざまな障害や苦難を乗り越え、強い信念を持って夢を実現させようとする彼らの目を通して、独裁政権下の生活やスーダンの歴史、文化を浮き彫りにする。

### 『ムヒカ 世界でいちばん貧しい大統領から日本人へ』

南米ウルグアイのホセ・ムヒカ元大統領は、収入の大半を貧しい人々のために寄付し、職務の合間には農業にいそむ。公邸に住むことを拒み、質素な暮らしを続ける姿から、いつしか“世界でいちばん貧しい大統領”と呼ばれるようになった。2012年にリオデジャネイロで開かれた国連会議で、人類にとっての幸せとは何かを問うたスピーチ動画が世界中で話題になり、日本では『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』(汐文社)という絵本にもなった。本作は、日本との知られざる関係があるという彼を、日本人若手監督が追ったドキュメンタリー。彼の生き方や言葉に触れながら、広く国外でも愛される大統領になった経緯や魅力に迫る。

●『ムヒカ 世界でいちばん貧しい大統領から日本人へ』  
2020年/日本/98分  
配給: KADOKAWA 監督: 田部井 一真

4月10日(金)よりシネスイッチ銀座ほか  
全国で順次公開。

公式サイトは  
こちらから



© 2020「ムヒカ世界でいちばん貧しい大統領から日本人へ」製作委員会



### 『ペトルーニャに祝福を』



●『ペトルーニャに祝福を』  
2019年/北マケドニア、フランス、ベルギー、クロアチア、スロベニア合作/100分  
配給: アルバトロス・フィルム  
監督: テオナ・ストゥルガル・ミテフスカ

4月25日(土)より岩波ホールほか  
全国で順次公開。

公式サイトは  
こちらから



© Pyramide International

北マケドニアの小さな町シュティプでは、毎年司祭が木製の十字架を川に投げ入れ、何百人もの男性がそれを手に入れようと川に飛び込む「神現祭」の儀式が行われている。本作は、十字架を手に入れた者には幸福と繁栄がもたらされるという女人禁制の伝統儀式に思いがけず参加し、十字架を手に入れてしまった一人の女性の物語。「女が十字架を取るの禁止だ!」と男たちから猛反発を受け、さらには教会や警察を巻き込んでの大騒動に発展していく。実話をベースに、従来のジェンダー観に疑問を抱き、幸せを追い求める主人公をユーモアをまじえて描いた本作は「第69回ベルリン国際映画祭」コンペティション部門エキュメンカル審査員賞を受賞した。

## 本の新着情報

### 『わたしは分断を許さない』



読者  
プレゼント  
詳細は  
p.38へ

元NHKのアナウンサーで、現在はフリージャーナリストとして活動している堀潤さん。本書は堀さんが、シリア、パレスチナ、朝鮮半島、カンボジア、香港、福島、沖縄など国内外を問わずさまざまな現場を巡り、「分断」の真相を追ったルポタージュだ。今年から東電福島第一原発事故やシリア内戦から10年目を迎えるが、いまだに復興は道半ばで支援も行き届かず、助けを求める人たちがいるという。そんな「生の声」を届け、未来のために何ができるかを読者に伝えてくれる一冊。

●『わたしは分断を許さない』  
堀潤 著/実業之日本社 1,800円(税別)

# JICAカレンダー 2020 SPRING BOOKS & MOVIES

あわせて  
こちら!!

#### 映画も公開中!

堀さんが監督だけでなく撮影、編集、ナレーションまでを務めたドキュメンタリー映画も現在公開中。いくつもの現場に赴き、そこにいる人物のストーリーを通して、分断の現実を映像でも映し出す。

2020年/日本/105分  
配給: 太秦 監督: 堀潤

3月7日(土)よりポレボレ東中野ほか  
全国で順次公開中。

公式サイトは  
こちらから



## SPECIAL BOOKS

### 漫画で知るJICAの協力

JICAの取り組みをもっとわかりやすく知りたいという人にお勧め!  
ウェブサイトで無料公開している三つの漫画を紹介します。



●『わたしをとりまく世界の話』  
イラスト: 漫画: 尾崎衣良

漫画は  
こちらから



東南アジアで今なお続く、強制的な労働や売春、臓器の売買など「人身取引」の問題を描く。



差別や暴力と闘っているアフガニスタンの女性たち。日本では信じられないような悲惨な状況下においても強い意志を失わず、自分の夢を実現した女性の実話。

●『JICAによるアフガニスタン女性警察官への支援』  
イラスト: 漫画: 井上きみどり

漫画は  
こちらから



●『マンガで知る青年海外協力隊』

漫画は  
こちらから



ブラジルで子どもたちに野球の指導をした隊員や、シリアの幼稚園で「遊びを通じた学び」を導入するなど幼児教育の活動に取り組んだ隊員など、10人の隊員による経験談。

### お家で楽しく学ぼう! 世界と日本のつながり

JICA広報室のSNSアカウント (Facebook、Twitter) では、世界とのつながりや、JICAが取り組む事業について随時情報を発信しています。国際協力をクイズ形式で学ぶコーナーや、途上国の人になって課題解決をするゲームアプリの紹介など、大人も楽しく学べる企画が盛りだくさん。ぜひチェックしてみてください!



[Facebook]



[Twitter]

\*新型コロナウイルスの感染拡大により、映画の公開延期等の可能性がございます。事前に公式サイトなどをご確認ください。

## 読者の声



### 1月号「栄養改善 食の不均衡に、みんなで挑む」を読んで

私が子どもだった何十年も前から、途上国の飢餓問題が取り上げられていました。今なお問題が続いていること、さらに栄養バランスなど新しい視点からの支援があることをこの特集で知ることができました。また、この領域の問題の深刻さを知るとともに、解決の重要性や解決できる取り組みがあることを具体的な事例に沿って見ることができました。  
(愛知県 / 30代 / 男性)

栄養がさまざまなSDGsに関連していることを知り驚きました。JICAの活動がそれぞれの国の課題を受け止め、またその国の人々と深く関わりを持っていて、とても温かい気持ちになりました。  
(北海道 / 10代 / 女性)

ソロモン諸島で、かつての伝統料理はバランスがよい食事だったのが、安価で調理の簡単な食品が入ってきたことで栄養の偏った食事になってしまったということが印象に残りました。食べるという生きていくうえで重要なことは、簡単にすませるのではなくきちんと手間暇をかけることが大切だと思います。  
(三重県 / 30代 / 女性)

マルチセクトラルという語句は一般的ではないので、記事が読みづらいです。適切な訳語を付けてほしいです。  
(大阪府 / 60代 / 女性)

▶ご意見ありがとうございます。今後配慮してまいります。(編集部より)

### 2月号「中東 深まる日本との絆」を読んで

初めて知ることが詰まった雑誌で、ほんの一部ですが中東のことをリアルに知ることができた気がします。私はこの春に看護師として新たな一歩を踏み出します。1年前、講義に来て下さったJICAの方(看護師)の話がきっかけで、青年海外協力隊という存在を知りました。私もいつか協力隊員の一人として世界を変える存在になりたいと強く思っています。  
(栃木県 / 20代 / 女性)

不安をあおるニュースが多い毎日ですが、私たちは世界のことを知らないまま生活しているとも考えられます。今月号の中東の特集では、明るい未来を展望できる楽しい記事ばかりでした。ヨルダンは人口の70%以上を若年層が占めるとのことで、世界一超高齢社会である日本だからこそできる支援があると思います。  
(大阪府 / 60代 / 男性)

## 《アンケートのお願い》

プレゼント付き

JICAや記事内容についてのご意見、ご感想をお待ちしております。また、こんな企画を実施してほしいなどのご希望もぜひお寄せください。お寄せくださった方の中から、抽選でプレゼントを差し上げます。下記項目をお書き添えのうえ、巻末のアンケートはがき、Eメール、またはファクスでお送りください。

- 氏名 ●住所 ●電話番号 ●年齢 ●性別 ●職業
  - 本誌を入手した場所 ●面白かった記事 ●本誌へのご意見・ご感想 ●JICAへのご意見・ご質問 ●ご希望のプレゼント番号
- \*お寄せくださったご意見・ご感想は、本誌やJICAのウェブサイトに掲載する場合があります。あらかじめご了承ください。ご記入いただいた個人情報は、プレゼントの発送および誌面の向上に役立てること以外の目的で使いません。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

◎応募締め切り 2020年5月15日

### [2020年4月号のプレゼント]

①

ミャンマーのお土産  
自然派化粧品「タナカ」の石鹸  
3名様



②

書籍  
『スポーツを通じた平和と結束』  
古川光明 著、  
佐伯印刷 1名様



③

書籍  
『わたしは分断を許さない』  
堀潤 著、  
実業之日本社 1名様



# mundi

APRIL 2020 No.79

編集・発行：独立行政法人 国際協力機構  
Japan International Cooperation Agency (JICA)  
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25  
二番町センタービル  
TEL: 03-5226-9781 FAX: 03-5226-6396  
URL: <https://www.jica.go.jp/>

制作協力：株式会社 木楽舎  
〒104-0044 東京都中央区明石町11-15  
ミキジ明石町ビル6F 『mundi』編集部  
TEL: 03-3524-9572 FAX: 03-3524-9675  
Eメール: [ML\\_JICAPR@jica.go.jp](mailto:ML_JICAPR@jica.go.jp)

- アンケートの送付、定期送本、バックナンバーの取り寄せに関するお問い合わせは木楽舎までお寄せください。
- 本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



定期送本のご案内

#### ●申し込み方法

巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送本期間・送付開始月号を明記のうえ、所定の金額(送料+手数料)を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送の手配をいたします。入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください。

\*複数冊、またはバックナンバーをご希望の場合は送料が異なりますので『mundi』編集部(木楽舎)までお問い合わせください。

次号予告(2020年5月1日発行予定)

## 5月号 特集 南アジア

宗教・民族・文化・言語などが多様性に富んでいる南アジア地域。地域の成長がますます期待されるなかで、南アジア地域におけるJICAの人材育成の取り組みや、人々との交流を紹介します。



『mundi』バックナンバーはJICAのウェブサイトでもご覧になれます。

JICA mundi

検索

<https://www.jica.go.jp/publication/mundi>

## 進む、イノベーションの“仲間集め”



コンテストの様子は、新型コロナウイルス感染が拡大する状況をふまえインターネットでの配信のみに。視聴者の投票によるオーディエンス賞も設けられた。

●「JICA Innovation Quest  
ファイナル・プレゼンテーション」  
コンテストの動画はこちらから



2020年2月22日、SDGsゴール2（栄養改善や持続可能な農業推進）をテーマに事業アイデアを競うコンテストが行われ、タジキスタンでの肥満を抑制する食器製造の提案が最優秀賞を受賞した。主催はJICA若手職員有志の提案に基づくプログラム、JICA Innovation Quest（ジャイカ・イノベーション・クエスト）以下、ジャイクエだ。ジャイクエチームは、JICAの組織内外の人材がそれぞれの知見を生かしてイノベーションを共創で生み出すべく、組織内外公募で選考された人材総勢30名、5チームを構成した。

アイデアを生み出す手法を学ぶ1泊2日の合宿、3か月のグループワークの場を経て、途上国からの留学生や有識者から意見も聴取。5チームそれぞれが斬新なアイデアを練り上げて、この日のコンテストに臨んだ。最優秀賞のタジキスタンチームは、現地に暮らす人々のコメントを意匠に反映させ、複数の試作モデルを制作して、斬新かつ実現可能性の高いアイデアを提示した。

JICAの新たな組織的取り組みの一つであるジャイクエ副賞として現地タジキスタンの調査の機会を提供するなど、同アイデアが事業化され、タジキスタンの人々の栄養状態改善が進むことを視野にJICAとしてサポートを続けていく。

ジャイクエが目指す共創によるイノベーションは、今後のさらなる展開が期待される。

## ニュース深掘り！ 民間人材とともに国際協力に革新を起こす



**JICA Innovation Quest チーム**  
2018年11月、同期職員5人でチームを結成しジャイクエを企画。JICA内の新規事業アイデアコンペを勝ち残った。現在は後輩の職員も加わり6人体制。前列左から、前田紫さん、金田瑞希さん、齋藤友理香さん。後列左から、山江海邦さん、八里直生さん、神武桜子さん。

ジャイクエは入構3年目の同期職員5人でチームを結成したところから始まりました。原動力となったのは「迷い」です。日々仕事の中で向き合う途上国の課題が途方もなく大きいものに思え、「自分に何ができるのか」「このやり方で本当にいいのか」と悩んでいました。JICAだけではできないことがいかに多いかを痛感する毎日でした。

私たちが希望を見出したのは、人とつながることです。社会にはさまざまな立場から、よりよい世界の実現を模索している人がたくさんいます。多様な分野で活躍する人々の力やこれまでになかった考え方を結集すれば、きっと新しい発想が生まれる。そう信じてジャイクエを立ち上げました。今回発表されたアイデアは、どれもこれまでの国際協力のイメージを超えた革新的なものばかり。私たち運営チームが1年以上取り組んできたことは間違っていないと確信しました。

多くの企業や個人の方がジャイクエに協力してくださいました。「世界のために何かしたい」という人々の思いが、少しずつ形になり始めているのを実感しています。ここで生まれたつながりがさらに大きなものとなり、世界を変える力になるよう、これからも一緒にジャイクエを盛り上げていただけるとうれしいです。

## JICA HEADLINE NEWS

- 3月12日 | ▶ **バングラデシュ 持続的な河川管理を支援**  
世界有数の大規模な網状河川の管理知識・ノウハウの習得などを支援。
- 3月 2日 | ▶ **北岡理事長がパキスタンとパレスチナを訪問**  
社会の平和と安定に向けた取り組みを確認し、さらなる関係強化へ。
- 2月28日 | ▶ **ケニア 経済特区の設立に円借款貸付契約**  
モンバサ港南岸のドンゴクドゥ地域に、経済特区設立のためのインフラ整備を支援。



◀◀ JICAのニュース&トピックスをもっと読みたい方はアクセス!  
<https://www.jica.go.jp/information/index.html>



3.すべての人に健康と福祉を  
9.産業と技術革新の基盤をつくろう  
17.パートナーシップで目標を達成しよう



カンダール州・農業総局で、残留農薬を調べる簡易検査のデモンストレーションを行った。

## 日本の衛生を世界へ

カンボジアは、世界でも有名な世界遺産アンコールワットがあり、行ってみたい世界遺産ランキングの第1位であるだけでなく、もう一度訪れたい国ランキングでもつねに上位で、多くの観光客が訪れる国です。

一方で、食品衛生の分野ではまだまだ課題が多く、カンボジア全体で食中毒は数え切れないほど発生しているのが現状です。食品の安心・安全は、農家・漁師などによる生産・飼育から、流通、加工、販売など、生産から食卓に届くまでに関わるすべての段階で確保できなければなりません。それには、カンボジア政府と民間事業者が連携しながら食品の安全性を向上させていく必要があります。

カンボジアで、安心・安全なフードバリエーションをどのように構築していくのか——私たちは日本が培ってきた「食品衛生の仕組み」を官民連携による検査サービスや衛生コンサルティングサービスの提供によってカンボジアに伝え、この課題に挑戦しています。  
\*生産から消費までの各段階で付加価値を高める食品流通。

今月の投稿文と写真(小林篤司さん 食品衛生のコンサルティング会社S.P.E.Cの社員として、2012年よりカンボジアと日本とを行き来しながらカンボジアに必要な検査の仕組みづくりを官民連携で進めている。

### あなたの投稿をお待ちしています!

「わたしが見つけたSDGs」に写真と文章をお寄せください。貧困や気候変動、格差ほか、いま世界が直面している課題やその解決に向けた取り組みのエピソードなど、SDGsの17の目標を身近に感じられる作品をお寄せください。

応募要項:写真1点(ご自身が撮影されたもの)、文字原稿400字以内。

\*写真内の被写体に関する肖像権およびその他の権利は、投稿者の責任において被写体や権利保持者の承諾を得るなど必要な措置をとったうえでご応募ください。

ご応募・お問い合わせ先▶ML\_JICAPR@jica.go.jp(「mundi」編集部宛)



### SDGsとは

持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)は「誰一人取り残さない」をスローガンに、格差や貧困、環境破壊など世界が直面している問題の根本的な解決を目指す17分野の国際目標。

持続可能な開発目標(SDGs)と  
JICAの取り組み

